

わが前川建築設計事務所の玄関には大変なお宝がある。ル・コルビュジエ作のリトグラフだ。前川のコレクションの一部なのだが、どういう経緯で、どんな基準で集められたのかはよくわからない。その中の一枚にこんな絵柄のものがある。ル・コルビュジエの理想とする建築の姿がわかりやすく描かれている。建物の足元はいわゆるピロティ形式で大地から浮き、その壁は柱から切り離され、自由な面となっている。屋根は平らで、緑が茂る屋上庭園。まさにル・コルビュジエの提唱する輝ける「新建築」の姿だ。

ところが、その足元、というか置き去りにされた大地に、不思議なモノが転がっている。黒い塊に封じ込められたフクロウの姿だ。その塊は半ば地面に埋め込まれ、その上にはル・コルビュジエがよく描く裸のたくましい人間が、あたかもそのフクロウが二度と地上によみがえることを許さないと言わんばかりに踏みつけ、直立している。これはいったい、なんだろう。近代建築の足元に今まさに葬り去られんとしているこの黒い塊とフクロウは……。

僕が思うにこれはフランスのアカデミーの象徴だ。フクロウが智慧や学問の権威を表すものとして描かれることは多い。この場合それはフランスの旧来の建築界を牛耳っているアカデミーの象徴で、ル・コルビュジエはそれを地中に葬り去り、その上に「新建築」をうち建てよと宣言しているのだ。そして、フクロウと共に大地に封印されている黒い塊。これは自由な建築精神の妨げとなるあらゆる束縛——例えば、建築にまつわる因習や風習、伝統や風土や様式の制約を象徴していると思う。

要するにここでル・コルビュジエは、新しい建築精神とその発現たる「新建築」の「自由」を高らかに歌い上げている。と同時に、「新建築」がすでにあったものから、でなく、むしろそれらを封じ込め、それらと決別することから生まれることを表している。すなわち、輝ける「新建築」の足元に封じ込められた「闇」を、この小品は——多分、期せずして——僕たちに伝えているのだ。

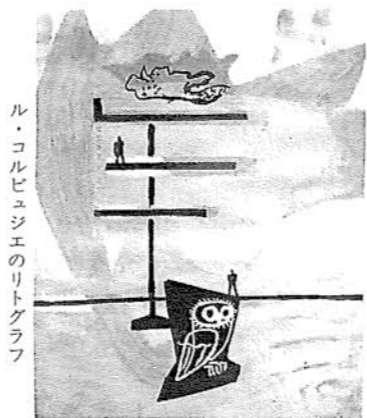
「新建築」の輝きと闇。これは広く世界の明暗に通じるものがある。例えば当時、王侯貴族の代わりに新しい建築の担い手となったヨーロッパ新興ブルジョア階級の富と、その供給源となったアフリカ・アジアの植民地の貧しさ。さらに現代では、あのワールドトレードセンターの具現していた光とそこに突入したテロリストたちが抱えていた闇、あるいはグローバリズムの名の下に鋭いコントラストで分極化されつつある世界の明と暗——どこかでつながっている。

前川はル・コルビュジエに心酔し、卒業式の晩にバリへ旅立ち、セーウル街35番地のアトリエの門をたたき、そんな前川がル・コルビュジエから学び、日本へ持ち帰った「新建築」。前川はその足元に封印された闇におそらく感じていた。そして、晩年のある時期から、あくまでも近代建築本来の明るみを失うことなく、それが地中に葬ったものを少しずつ建築に取り戻そうとしていたのではないか。

「近代建築が後生大事に守ってきた人間の自由って、いったい、なんだったんだろうね」。前川が最晩年につぶやいた言葉だ。近代建築技術が人間に与えた自由。どこにでも、だれにでも建てられる建築。どんなに巨大な空間でも、どんなに高いタワーでも技術は可能にする。でもその自由は人間になにをもたらしたのだろうか。

1950年代、神奈川の県立音楽堂に代表される軽く、明るい、いかにも「新建築」のサンプルというべき一連の作品を生みだしてから、前川の作風は変わる。例えば、窯で焼き固めた鑑のようなタイルでおおわれた厚い壁で空間をくるむようになる。それは人の欲望のおもむくままに際限なく膨張し、薄くとりとめのない膜となりつつある近代建築の壁に、人の温もりと人間らしいスケール感を取り戻す試みだったのかもしれない。

しかし前川が建築に人間らしさを希求するその一方で、同じ人間が巨大なタワーに群がり、マネーゲームに骨身を削る。民族や信条、宗教の対立から果てることのない争いを繰り返す。「人間とはなんだろう」。前川の最晩年、その心に去来していたのはこの問いかけであつたらうと僕は思う。



ル・コルビュジエのリトグラフ

## ●筆者紹介

・坂田泉(さかた いずみ)

・1955年6月東京都生れ

・京都大学工学部研究科修了

・入所 1982年4月 2006年現在、在籍中

・担当作品 国立音楽大学附属幼稚園、横浜市中心図書館、富山県小杉町民図書館、

光明学園相模原高等学校 他